15　次の文章は、『増鏡』の一節で、後宇多法皇の病が重篤になったことが述べられた後に続く場面である。これを読み、後の問い（問１～問５）に答えよ。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〈大阪大〉二〇一九年度出題

　そののち御孫あり。世をしろしめさむ時の御心づかひなど、いま少し細やかに聞こえしらせふ。宮は先帝の御かはりにも、いかで心の限りつかうまつらんとあらまし思されつるに、あかず口惜しうて、いた　しほたれさせ給ふ。

　御仲らひ、うはべはいとよけれど、まめやかならぬを、いと心苦しと思さるれど、に出で給ふべきならねば、ただ大方につけて、世にあるべきことども、この頃少し世に恨みあるやうなる人々の、わが御心にはあはれと思さるるなどあまたあるをぞ、御心のままなる世にもなりなん時は、かならず御用意あるべくなど聞こえ給ひける。中御門の、六条の、、など聞こえし人々の事にやありけん。

　その夜はとまり給へるもしろしめさで夜うちふけて、少しおどろかせ給ひて、「春宮はいつ帰り給ひぬるぞ」とのたまふに、うち声づくりて近く参り給へれば、「いまだおはしましけるな」とて、いとらうたしと思されたる御気色あはれなり。大方の気色、院の内のかいしめりたるありさまなど、よろづ思しめぐらすに、いとかなしきこと多かれば、宮うち泣き給ひぬ。

　心細ういみじとのみ思さるるに、元年六月二十五日、つひに隠れさせ給ひぬ。御年五十八にぞならせ給ひける。後宇多院と申すなるべし。

　御門またたてまつる。あけくれねんごろじ奉り給ふさま、いとかたじけなし。御の皇后宮と聞こえし、今はと申すも、まいてひと所をのみ頼み聞こえさせ給へるに、心細ういみじと思し嘆くこと限りなし。昔の内侍のかんの殿、院号ありてと聞こゆるも、この院の御かげにてのみ過ぐし給へればより所なくあはれげなり。

　御四十九日は八月十日余りの程なれば、世の気色なにとなくあはれ多かるに、女院、宮たちの御心のども、朝霧よりも晴れ間なし。十五夜の月さへかき曇れるに、故院の位の御時に、とてひしは、の宰相の女なり。　（ウ）その世の古き友なれば、同じ心ならんと思しやるもむつましくて、万秋門院のたまひつかはす。

　　（Ａ）仰ぎ見し月もかくるる秋なればことわりしれとくもる空かな

いとあはれに悲しと見奉りて、御返し、宰相典侍、

　　（Ｂ）光なき世はことわりの秋の月涙そへてやなほくもるらん

（注１）　　後二条天皇の皇子・親王。

（注２）　先帝　邦良親王の父・後二条天皇。

（注３）　　当時の天皇である後醍醐天皇のこと。邦良親王の叔父にあたる。

（注４）　　喪服のこと。

（注５）　じ（ず）　亡き親の供養をすること。

問１　傍線部（ａ）（ｂ）（ｃ）を現代語訳せよ。

◎問２　傍線部（ア）はどのようなことを述べているのか、わかりやすく説明せよ。

問３　傍線部（イ）について、主語（動作主）を補って現代語訳せよ。

問４　傍線部（ウ）について、「同じ心」の具体的な内容を補って現代語訳せよ。

◎問５　和歌（Ａ）（Ｂ）について、比喩表現を踏まえて現代語訳せよ。

【解答と採点基準】

問１　（ａ）＝Ａかねてから Ｂお思いになっていた

Ａ＝３〔「以前から」「前々から」なども可。〕

Ｂ＝７〔尊敬語の訳が不適切な場合は全体０。〕

　　　（ｂ）＝涙をお流しになる。

　　　（ｃ）＝頼りにする者もなく気の毒そうである。

問２　Ａ今の後醍醐天皇の在位中には、世の中に対して少し不満があるような人々で、後宇多法皇が気の毒だとお思いになっている者たちがたくさんいるが、Ｂ皇太子が即位して思うままに政治を行えるようになった時は、その人たちに心配りして必ずふさわしい処遇をしてやってほしい、ということ。

Ａ＝５〔「後醍醐天皇」と「後宇多法皇」の名が説明にない場合は０。〕

Ｂ＝５〔「皇太子」、また、「御用意」の具体的内容がない場合は０。〕

問３　Ａ夜が更けて、後宇多法皇は少しお目覚めになって、Ｂ「皇太子はいつお帰りになったのか」とおっしゃるので

「後宇多法皇」の補いが記されていなければ全体０。

Ａ＝５〔「おどろく」の訳と尊敬語の訳が適切でない場合は０。〕

Ｂ＝５〔尊敬語の訳が適切でない場合は０。〕

問４　Ａ宰相典侍は後宇多法皇が在位していた時の古い友人であるので、Ｂ後宇多法皇が亡くなったことを偲び悲しむ気持ちは同じだろうとＣ思いを馳せなさるのにつけても慕わしくて

Ａ＝４〔「その世」の具体的説明がなければ０。〕

Ｂ＝４〔「同じ心」の具体的説明がない場合は全体０。〕

Ｃ＝２〔「思いを馳せる」は「想像する」「推察する」「はるかに思う」なども可。〕

問５　（Ａ）＝Ａ仰ぎ見た月も隠れてしまったように慕い申し上げていた後宇多法皇が亡くなってしまったこの秋なので、Ｂ別れの悲しみはこの世の定めであることを理解せよとばかりに曇る今夜の十五夜の月の空であるなあ。

Ａ＝７〔「月が隠れる」と「法皇が亡くなる」との比喩関係が記されていなければ全体０。〕

Ｂ＝３〔「ことわり」が単に「道理」という訳のままの場合は減点２。〕

　　　（Ｂ）＝Ａ後宇多法皇が亡くなって光が無くなってしまったこの世では曇るのも当然である秋の十五夜の月だが、Ｂ人々の涙を添えてさらにいっそう曇っているのであろうか。

Ａ＝７〔「光なき世」と「法皇が亡くなってしまったこの世」との比喩関係が記されていなければ全体０。〕

Ｂ＝３〔現在推量と疑問の訳が不適切な場合は０。〕

【現代語訳】

　その後、（後宇多法皇の）御孫の皇太子のお出ましがある。（皇太子が将来）世をお治めになる時のお心遣いなど、今少し詳しく申し上げお教えなさる。皇太子は、先帝の（父の後二条天皇の）御代わりとしても、どうにかして心の限りお仕えしようと、問１（ａ）かねてからお思いになっていたので、（法皇の命が長くないと思われるのも）もの足らず残念で、ひどく問１（ｂ）涙をお流しになる。

　（皇太子と）帝（＝後醍醐天皇）の御仲は、表向きはとても良いけれども、誠実ではないので、（法皇は）とても気がかりにお思いになるけれど、言葉にお出しなさるはずのことではないので、ただ大体のところに、世に処すべきことなどや、またこの頃（不遇であるため）少し世に恨みがあるような人々で、私（＝後宇多法皇）の御心には気の毒だと思われる人々などがたくさんいるのを、（皇太子が即位し）御心のままに（政治を行えるように）なる世にもなるだろう時は、必ず（彼らを取り立てるなど）ご配慮あるようになどと申し上げなさった。中御門の大納言経継、六条の中納言有忠、右衛門督教定、左衛門佐俊顕など申し上げた人々の事であったのだろうか。

　その夜は（皇太子が）お泊まりになったことも（後宇多法皇は）おわかりにならないで、問３夜が更けて、（後宇多法皇は）少しお目覚めになって、「皇太子はいつお帰りになったのか」とおっしゃるので、（皇太子は）少し咳払いして近くに参りなさったところ、「まだいらっしゃったのだな」と言って、とてもいじらしく思われた御様子はしみじみといたわしい。あたり一帯のご様子や、院の中の沈んだ様子など、いろいろと思いめぐらしなさると、とても悲しいことが多いので、皇太子はそっとお泣きなさった。

　心細くたいそう悲しいとばかりお思いになる頃に、正中元年六月二十五日、（後宇多法皇は）ついにお亡くなりになった。御年五十八歳におなりでいらっしゃった。（おくり名は）後宇多院と申し上げるということである。

　帝はまた喪服をお召しになる。朝夕、丁寧に（後宇多法皇を）供養申し上げなさる様子は、とても畏れ多い。（後宇多法皇の）御娘の皇后宮と申し上げた方で、今は達智門院と申し上げる方も、ましてこのお一方をだけお頼り申し上げなさったので、並々でなく心細くお思い嘆きなさることは限りがない。昔の内侍の督の殿で、院号があって万秋門院と申し上げた方も、この院の御庇護のもとでばかりお過ごしになったので、問１（ｃ）頼りにする者もなく気の毒そうである。

　御四十九日は八月十日余りの頃なので、世の様子は何となくしみじみとあわれなことも多いのにつけても、女院や、宮方の御心の内などは、朝霧よりも晴れ間がない。十五夜の月までも曇ってしまったので、故院のご在位の御時に、宰相典侍としてお仕えしていた者は、飛鳥井雅有の宰相の娘である。問４（宰相典侍は）後宇多法皇が在位していた時の古い友人であるので、（後宇多法皇が亡くなったことを偲び悲しむ）気持ちは同じだろうと思いを馳せなさるのにつけても慕わしくて、万秋門院が（次の歌を）お詠みになりお遣わしになる。

問５（Ａ）仰ぎ見た月も隠れてしまったように慕い申し上げていた後宇多法皇が亡くなってしまったこの秋なので、別れの悲しみはこの世の定めであることを理解せよとばかりに曇る今夜の十五夜の月の空であるなあ。

とてもしみじみと悲しいと拝見して、ご返歌に、宰相典侍（が次の歌をお詠みになった）、

問５（Ｂ）後宇多法皇が亡くなって光が無くなってしまったこの世では曇るのも当然である秋の十五夜の月だが、人々の涙を添えてさらにいっそう曇っているのであろうか。